

年 組 名 前 :



窯たき569回、作品数十万点
運営の太田さん「次代に継承」

増穂登り窯 30年

富士川町平林の「増穂登り窯」は10月で開窯から30年を迎えた。版画家で小説家の故池田満寿夫さんも作陶のため通い、8月まで569回の窯たきが行われた。池田さんと親交があり、30年にわたり窯を営んできた陶芸家の太田治孝さん(70)は「多くの人が携わり、美しさを求めて数十万点の作品が生み出された。30年間続けてきたことそのものが芸術と言える」と話す。

増穂登り窯は、電気窯で制と相談された太田さんが知人作活動をしてきた池田さんかから「まさきで器を焼成したい」と頼られて場所を選定し、1990年10月に旧増穂町に開設した。98年までに、登り窯や「池田満寿夫八方窯」など8つの窯を設けた。窯によって仕上がりが異なるため、複数の窯で一つの作品を何度も焼くことができるのが特徴という。



焼成した陶器を出す利用者 一いづれも富士川町平林

山梨のほか、東京や神奈川県、静岡など近隣の作家らが通い、8月までの窯たきは569回を数える。1回当たり数百点の作品を焼くこともあり、30年間生み出されたのは数十万点。焼成では環境負荷に配慮して間伐材を使ってもらい、太田さんは「木材以外

の燃料に比べて二酸化炭素排出量を抑制できるだけでなく、山の荒廃を防ぐことにもつながる」と話す。運営は会員制で、現在は約75人。太田さんが窯たきの日を指定すると、希望する会員が作品を持ち寄ってくる。窯に作品を入れる作業だけで1週間、焼き上げる作業に3、10日かかるといふ。太田さんは「声掛けをしても集まらなかつたらやめようと思っていた」と笑うが、8月も盛況だった。

30年を記念し、これまでの歩みを文章にまとめたところ、厚輪用紙65枚分になった。「前ばかりを向いて走ってきたが、振り返ってみたら道ができていた。積み重ねた経験や技術を次世代に継承するための準備をしている」と先を見据える。

(2020年10月6日付 山梨日日新聞 19面)

問1

太田治孝さんが「増穂登り窯」を開設したきっかけは何ですか。

問2

焼成(原料を窯で加熱)する際、間伐材を使うメリットを書いてください。

①

②

問3

全国各地の有名な陶磁器名を5つ挙げました。それぞれの陶磁器の産地(県名)を調べましょう。

くたにやき 九谷焼 → 県

せとやき 瀬戸焼 → 県

ましこやき 益子焼 → 県

しがらきやき 信楽焼 → 県

ありたやき 有田焼 → 県